

る一地方に特に、著しく感ぜらるゝ色コ

ンボジションは構圖、アンデパンダンは佛語にして英語の Inde pendent なり、

■一、水彩畫を描く上に於て、みだりに濃厚なる色彩を施すは不可なるものや、二、陰影を描くには普通如何なる色を用ゆるか、三、水彩畫筆は先のあるものより無きものゝ方可なるか、四、水彩畫を描く上に於て、繪具を施したる、跡の良く見ゆるものがよきしか、(棕栢花生)、◎一、濃厚なる色彩を施すのに、決して差支へはないが、みだりに施す事は不可、二、こゝでこう云ふ色を影に用ふると説明しても自然は、決して其通りになつて居ない、其物體自身の色や周圍の色や光線の工合で色々に變化するものである故に、こゝに、説明する事は出来ないが、普通多くの場合には、強い透明した色が用ひられる、三、これも人々によつて好嫌はあれど普通先のあるものより少し無くなりし物の方が良し、四、砥石を用ひたる如きなめらかな物より、描きたるものらしき方がよし、されど無鐵

砲なる、筆の跡は困る。

讀者の領分

▲吾々は水繪をどこまでも尊重したい、又色彩に依つて生活の一分部の充實を期すと云ふ考へから今度 TASOGARU 會と云ふ畫會をこしらへて色彩の妙味を味ひ、美的觀念を以つて、審美的見地から生活を豊富にしようと思ふ事にした。主として水繪を研究しようと思ふのが吾々同人の考へである。諸兄の中吾々の舉に意ある者があるならば是非御賛成を願ひ度い、それで毎月一回水繪の畫集を作つて同人作品の批評をし合ふと云ふのである。一集は既に作つた。會費は金五錢である、畫集は美しい華やかな感の好いものを作るつもりである、同人は毎月水繪三枚を出し合ふ事にした、(ワットマン十六切以下)紙はワットマンでなくともよい。會費は郵券で御送附願ひ度い、九月頃同人の作品展覽會もする考へである、其事は委しく御賛成の諸君に御相談する考である。委しい會則御入用の方は二錢郵

券封入の上御申込を願ひ度い。御賛成の諸兄は下名迄御一報を願ふ。(長野縣諏訪郡四賀村三〇三番地横川毅方 たそがれ會宛) ▲大阪では近頃盛んなものだ日曜など少なくなるとも五人や六人には必ず遇ふ自分は年にも尙ず腕若かなのでうら恥かしく影ばかり追つて居るのだ、自分は先月初めて羅針盤を得たそれまでは先生も良友も何にも持たなんだ故に殊更に會友たるを得たのを喜ぶ。斯く孤客として物淋しくやつて居ても確然たる自信はもつて居たのだ、尙今後も持續したいと思ふのだ、それは「徒に人を摸す愚は斷然やるまい、出来るだけ苦勞をして感想を着實に寫したい」これだ、今後本會の指導に依つて如何に變化するかは知らぬが、それでも決して消化せずには取らぬつもりだ。僕は思ふ「繪は百人百様のものだらう師を慕ふても必ずしも流を汲まねばならぬものではあるまい」これが僕の主張だ。新入會の挨拶にかへ主義と主張を(大阪散濤生) ▲八十八號の挿繪では、『臺灣の沿岸』と『溪』とが最もよい、記事では『調

色に就て』は有益の話であり『水彩畫評』も挿入の寫眞版と共に面白く讀みました、しかし忘る可からざる記事は、みづゑの續刊に就ての一文です。尊敬すべき大下先生没後から本日に至る本誌の履歴を見ては同情にたえられませぬ。どうか編輯者諸君には御自重あつて本誌のために盡して下さい。(A A A 成節生) ▲僕は「みづゑ」を無二のフレンドとして居る、だから、毎月末になると毎日毎日郵便配達が來ると「みづゑ」ではないかと思つていつも出て行くのである、そして手に入ると先づ挿繪を見る、八十八號の原色版等はいづれもよかつた。して息もつかずに記事を読み通して仕舞ふ、さて見てしまふと又來月のが待ちどほしくて仕方ない、殊に卷末の來月豫告を見て大方を豫想して見ると尙更待ちとほしい、そしてわけもなく日の立つのを喜ぶのである。どうか、成るべく毎月早く發送して下さい。(小田原、合歡の花) ▲近頃「みづゑ」の體載が大分とよつて、非常に嬉しく思ふ、石川先生の御話は吾々地方の者には

非常に有益に思ふ。どうか講話めいたものをどしどし御掲載願ひたい(石狩、山崎生) ▲當地で此の夏講習會を開いて頂くわけにはゆかないでせうか。希望者も可成ある様に思ひます。吾々地方の者は直接良師につくことが出來難いから時々講習會の開かれん事を切に望むのである(青森市、松井高志)

新刊紹介

◎通俗觀音講話

壽山良海著

神奈川縣橋樹郡生見村生麥龍泉寺發行
菊版四百頁定價金一圓

觀音經全部を二十八席に分け、例を古今にとつて極めて通俗的に講義してある、卷頭には雲照律師の肖像及び其の筆蹟其他寫眞版數葉、兎に角一見して著者の苦心の程が察せられる。

◎サソラ(第二號)五月廿日發行

大阪市外大仁一八一ノ三サソラ發行所

要目

ロダンの製作を胸に抱いて 今戸精司

畫室より 星野天外
玉手より 織田一磨
靈光 佐々草迷宮
短歌
大仁より
其他

寄稿を募る

□水彩畫寫生旅行、水彩畫展覽會紹介、又は批評、水彩描寫の經驗談、又は感想錄、水彩畫に關係ある書籍(和洋をとはず)の批評、水彩畫家傳、等其他苟くも水彩畫に關係したるものはすべて歓迎す。
□文章の長短等は隨意、他はすべて卷末の會告による。
□每號の登載文中秀逸なるものには『みづゑ』一部贈呈す。